

## 禍生得意 福育隱微

昭和四十年一月二十三日、選挙区向けの後援会会報「東京だより」に寄稿したもの。池田首相の側近としての心情が溢れている

郷里の皆様。

明けておめでとございます。年が改まったので、例によって今年も「東京だより」をお送り申上げることになっています。

それにしても昨年は私にとっては大変な年でありました。暗い年でありましたが、私の生涯にとっては大切な年でもありました。

八月六日に長男正樹の死去に遭い、九月九日には池田前首相の入院、十月二十五日には池田さんの辞意表明、そして十一月九日には池田政権の閉幕と佐藤政権の開幕という不慮の出来事が相次いで生起し、その舞台回しに明け暮れた年でありました。

時というものは不思議な構造をもっております。ちょうど川の流れるように、淀みなく静かに流れる時もあれば、

激流や急湍となって荒れ狂う時もあります。しかしその時の流れに棹さず人間としては、常に敬虔な気持と周到な注意をもって、これに対処して誤りのないように心掛けることが大切であると存じます。何となれば禍というものは多くは得意の時に生じ福というものは殆んど例外なく隱微の中に育まれるものですから。

時に朝と夕べがあり、暁と夜があるように、事に始めと終りがあるように、政権にも商売におけると同様に、店開きと閉店があるものです。私は、不思議な運命で、池田政権の店開きに参画すると同時に、その閉店を切盛りする役柄をにないました。政界の歴史の中で、このような役柄を担当できた政治家は、少いと思います。ところが、凡ての事がそうであるように、政権にとつてもその閉幕がその開幕よりも一層むずかしいことであるようです。何となれば閉幕に当つて事を誤れば、その政権の名声は一瞬にして台なしにしてしまふおそれがあるからであります。

九月上旬、池田さんの病状を知つてから、私の脳裏には、愈々池田政権の閉幕を考へる時が来たと思ひました。それには先ず診療に當る医師団の診断を総合的にとりまとめなければなりません。それには相当の時間がかかります。同時にこれを前提として池田首相御自身の心の整理をお願い

しなければなりません。そのためにも相当の時日がかかります。幸いに十月には世紀の祭典オリンピックがある。私はこのオリンピック開催中の時間を借用して、以上二つのことを目立たぬように仕遂げることができたのであります。

オリンピックの聖火が、全世界の人々の深い感慨の中に、静かに消えて行ったのは、十月二十四日の夕闇がトッブリ垂れこめた時でありました。私はその翌日の二十五日、その日は日曜日でありましたが、池田さんに引退の意志を表明していただくことにいたしました。その時点は、早くもなく遅くもないと判断したからです。そしてそれからの二週間は所謂、後継首班の選考という大事に没頭したわけです。

今回の首班選考は、前任首相の病氣引退とこれに対する全国民の同情という静かなしめやかな背景の下に行われるという特長がありました。そこで自民党内はもとより世間の世論も、静かな話し合いにより、出来得れば池田さんの指名という形で行われるのが適当だというのが支配的な空気がありました。この空気を体して、池田さんは、自民党の川島、三木両氏と私に後継首班を、円満かつすみやかに選考せられたいと委嘱をなされ、私共も、その意を体し

て、その事に当りました。

自民党本部においては川島、三木両氏が表に立つて党内の意見聴取に当り、毎日毎日の、池田さんと川島、三木両氏との連絡には私が当りました。夜もろくろく眠られない、静かながら息詰まるような二週間でありました。若しこの調整に失敗するというようなことになる、それは池田さんとその執行部のわれわれの不面目に止まらず、自民党自体の危機を招き、ひいては日本の民主政治は国内外にわたって、その威信と信用を失墜するという由々しい大事になるのだという責任感が、私の頭に常にのしかかっておったからです。しかし、後継候補と目される佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎の三氏とも、たびたび会い、この三氏から、

- (1) 誰が首班に選ばれても他の二氏は無条件に協力する。
- (2) 十一月九日の内閣首班候補決定の両院議員総会の円満な運営に協力する。

という二つの確約をとりつけることに成功して、事態の收拾は漸く軌道にのってきました。

次に三氏の中誰を首班に選ぶかという問題であるが、三氏共、あらゆる角度からみて、夫々に長短があるが、この時局を最も円満に收拾することが、日本の民主政治の内外

にわたる信用の観点から第一義的に大切なことであるとす  
るならば、この第一義諦に照準を合せて一人にしぼること  
が最も適当だということに池田首相をはじめ、川島、三木  
両氏と私の意見は一致し、最終的に池田首相の指名によつ  
て、佐藤栄作氏が首班に選ばれたのであります。それにし  
ても対立候補であつた河野、藤山の両氏は、この指名に何  
の異議を申立てることもなく、円満且秩序正しく、後継首  
班の指名に協力してくれました。そして自民党の内外にわ  
たる権威と信用の保持に貢献してくれました。武士の態  
度として誠に立派なものであり、私は両氏に深甚の敬意  
を表明いたしたいと存じます。

十一月九日午後、首班指名の終つた直後、私は病院に池  
田首相を訪ね、この大事が静かな秩序の中に完結できたこ  
とを報告し、「今日という日は、貴方にとつても、私にと  
つても、生涯における最良の日でありましたね」と悦び合  
つたことでした。

歴史における時間というものは、いつも何の変哲もなく  
推移するようでありますが、時にはその一瞬が国民と国家  
と世界の運命を変えることがあります。ところがそのよう  
な一瞬というものが、何時私共を訪れるか判らないもので  
す。従つて私共は、常に心を澄まし、敬慮な念慮を持して、

この神の時間に立ち向う覚悟をもつていなければならぬ  
と思ひます。

それにしても、このような国家的大事を、直接手にかけ  
ることができるような位置に、不肖な私をおいて下さつた  
のは皆様であります。これからの私には何時同じような運  
命の政機が訪れないとも限らないと思ひます。しかし私は  
皆様のかわらない友情と支持を、そして、そのみを頼み  
の網として勇敢にこれから訪れるであろう数々の政機に正  
しく処してまいる決意であります。重ねて皆様のかわらな  
い友情と支持をお願いして、御挨拶いたします。